

私たちの住んでいる地球は自分たち人間だけのものではない——この考えから出発する新しい、夢豊かな、創造的な努力には、(自分たちノ扱ッテイル相手ハ、生命アルモノナノダ)という認識が終始光り輝いている。生きている集団、押しやり押しもどされたりする力関係、波のうねりのような高まりと引き——このような世界を私たちは相手にしている。昆虫と私たち人間の世界が納得し合い和解するのを望むならば、さまざまな生命力を無視することなく、うまく導いて、私たち人間にさからわれないようにするほかない。

人におくれをとるものかと、やたらに、毒薬をふりまいたあげく、現代人は根源的なものに思いをひそめることができなくなつてしまった。こん棒をやたらとふりまわした洞穴時代の人間にくらべて少しも進歩せず、近代人は化学薬品を雨あられと生命あるものに浴びせかけた。精密でもろい生命も、また奇跡的に少しのことではへこたれず、もり返してきて、思いもよらぬ逆襲を試みる。生命にひそむ、この不思議な力など、化学薬品をふりまく人間は考えてもみない。(高キニ心ヲ向ケルコトナク自己満足ニオチイリ)、巨大な自然の力にへりくだることなく、盲人蛇におじず、ただ自然をもてあそんでいる。

——(自然の征服)——これは、人間が得意になつて考え出した勝手な文句にすぎない。生物学、哲学のいわゆるネアンデルタール時代にできた言葉だ。自然は、人間の生活に役立つために存在する、などと思いがついていたのだ。応用昆虫学者のもの考え方ややり方をみると、まるで科学の石器時代を思わせる。およそ学問ともよべないような単純な科学が最新の武器を手にして勝手なことをしていると、何とそらおそろしいことか。おそろしい武器を考えだしては、その鋒先を昆虫に向けていたが、それがほかならぬ私たち人間の住む地球そのものに向けられていたのだ。